5月の風

サッフォー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
５月の風

【Ｎコード】
Ｎ１３３１Ｃ

【作者名】
サッフォー

【あらすじ】
１７歳。初めて訪れた恋にためらいながらも、一生懸命受け止めていきます。しかし、どんなにゆるやかな坂でも、一度進みはじめたら、どんどん加速していくもの。高校生の桃香の、とっても純粋な恋のお話です。

第1話：はじまり（前書き）

更新は非常に遅いですが、気ままに書いていこうと思います。
感想をいただけると嬉しいです。

第1話：はじまり

普段よりゆっくり時が流れている気がする、土曜日の午後。
暖かくて、空気まで優しい。2階の窓から見える葉の裏も、太陽の光に透けていた。

桃香は今日も図書館に来ていた。昔から本の虫で、小さい頃からよく親に連れてきてもらっていたが、高校に入ってぐんと行動範囲が広がったとともに、図書館にも自分で行くことを覚えた。そしてこうしてよく来ては、お気に入りの席に腰を落ち着け、物語の世界にはまるのが常であった。
館内の奥に、4人掛けの机が10卓ほど並べられていて、桃香はその、窓際の席をいつも陣取っている。そこからは外のケヤキが見え、今の季節ならツツジが満開だ。朝、開館間もないころにくると、ケヤキの葉の木漏れ日が白い机にシルエットとなって、さわさわと揺れている。
このゆったりとした空間に包まれて本を読めるなど、桃香にとってこれほど幸せなことはなかった。

ところが、この日だけは違った。
「はぁ…」
本から顔を上げ、この日何度ともしれないため息をついた。
ああっ、もう。今日は本の世界に入れない。
一生懸命集中しようとするのだが、すぐに目は表面をなでるだけとなっており、はたと気付くとその行為すら止まってしまう。
あ〜、ちゃんと読むんだ、自分っ。
何回喝(かつ)をいれてもどうしても、内容が頭に届かない。知らないうちに主人公が大変な目にあっている。あららと思っているうちに、思考はどこまでもとおくとんでいってしまう。

どうしてこんな風になってしまったのかというと、実は昨日、桃香には信じられないことがあったのだ。

昨日は金曜日で、その放課後のことだった。部活へ急ごうとしているところ、複数の男子が桃香のいる教室をのぞいていた。可愛い子揃いのクラスだったし、だからこそ男子がらんらんとして女子ウォッチングにやってくるのもよくあることだったので、気にもとめずにすり抜けていこうとした。

しかし、やっと通り抜けたと思った矢先、こともあろうかその集団に呼び止められてしまったのだ。

「小谷さん！」

えっと驚き、首を少しかしげて振り返った。

あたしの名前、呼ばれたよね？

動揺を瞳の奥に隠そうとしていると、男子の集団が笑ったりつつき合ったりしながらなにやら盛り上がっている。

あのぉ、あたし用がないなら早く行きたいんですけど…

いっこうにふざけているようにしか見えない男子をじぃっと見ながら、何かあるなら早く言えよ、と思っていると、ようやく一人の男子が押し出された。かたまりの中から、すぽんっと絞られて、ころんと転がり出てきたように。

後ろのかたまりくん男子たちは、ぅおーやらぅワハハハやら、なんだか訳の分からない声を上げて、転がり出てきた一人の背中をさしてとても楽しそうである。集団の個々の見分けは全くつかないけれども、その分離した彼は、やっと桃香の脳に伝達された。

その人はさっきまで後ろとほとんど変わらない存在だったのに、よく観察すると、心持ち緊張しているようだ。

連れに困ったような視線を送り、髪をぐしゃぐしゃっと掻いた。

「ほらっ」

「おい～」
ヤジがうるさく飛ぶ。
これはもしかして、あたしにも春が来るのか？突然めばえた認識に、はやる心をなだめ、桃香も困った表情を浮かべて、目の前の男子を見た。
「えっと…」
「「おおっ！！」」
せっかく言いかけたところに邪魔な合いの手を入れられ、彼はまた口を閉じ、集団に振り返って何か言いたそうにしたようだった。するとすっとノイズが消えて、同じような顔の男子たちが、「さあどうぞ」とでも言うように同じように口を結んで笑った。
「あの、メアド教えてくれない？」
「え、あたしの？」
「うん。」
やっぱりあたしのメアドを聞きたかったんだぁ。
桃香は頭が半分のぼせてしまった。
他の子が男子にメールアドレスを聞かれているのを目にしたことはあっても、桃香自身はそういう対象になったことがなかった。だから、知ってはいたけれど、いざ自分の番になってみるとどう対処してよいのか分からない。
どうしてみんな、あんなに気軽にメアドを交換して、しかもそこから恋とか発展しちゃってるんだろう。
まさか、こんなにも恥ずかしくて動転するものだとは思わなかった。でも、ドキドキして、イチゴとハッカのドロップをひとときに口に含んでいるみたい。甘くて、心がすーすーするのだ。しかも、嬉しい。
「あ、あの、じゃあ。」
耳の後ろからむわあっと湯気が出てきそうだった。ギクシャクとトートバッグから携帯をとりだして、両手で彼の方に向けた。
「マジで？」彼は嬉しそうに言った。「じゃ、赤外線で送ってくれ

る？」
「はい。」
赤外線を送るとき、手が震えてしまった。
「ありがと。今日帰ったら送るから、登録しといてな。」
そう言って、彼はまたがやがやとうるさい集団に戻り、にっと笑って廊下を帰って行った。

桃香はまばたきを3度して、彼だけがかたまりの中から存在感を持って、別個の人間に見えるのを確認した。あのカッターシャツだけは、他の人としわの寄り方が違う。スニーカーもあか抜けているようだ。
うわぁ……――
あたし、メアド聞かれちゃったよ。
ちゃんと今、地面にたてているかどうかも自信がない。桃香は今日来るであろうメールに期待しつつ、携帯をぎゅっと握りしめた。ドキドキがおさまらない。

まだ初夏だというのに、一人サウナに迷い込んでしまった子猫に、5月の風が吹いた。

第2話：そわそわ

そんなことがあったから、今日はとてもではないが本などに気が向かないのだ。
まさか、だってまさかだよ。信じらんない。

桃香は読んでいた本をあきらめ、観念してえいやっと閉じた。白い机にほおづえをつき、窓の外を見やると、葉っぱたちが気持ちよさそうにささやき合っている。
これを開けたら、きっと涼しい風が入ってきて、多少は気分転換になるのだろう。でも、今のくずぶっている興奮は決して嫌なものではなく、むしろずっと浸っていてもよかった。

昨日家から帰ったあとのことを思い出すたびに、皮膚の温度が1，2度上がる気がする。『ヨロシク』ときたメールは、ごくごくシンプルで、互いに自己紹介程度しかできなかった。
それでも、何を送ればいいのか分からず、どこを血迷ったか好きな食べ物などの話題を振ってしまった。今どきのコウコウセイなら、そんなのないよな、小学生かよと自分でもつっこみたくなるほど恥ずかしい。けれど、その話題からおいしいラーメン屋さんの話になったのはよかった。勝手に汽車を動かしてしまって困っていたら、どこぞの優しい誰かさんが、線路を正しい方向に直してくれたみたいだった。ラーメン屋さんならコウコウセイにふさわしい内容ではないか。

ふふふっと笑って、桃香はその名の通り、桃色の世界に浸った。
何より甘酸っぱいのは、桃香のことを「モモカちゃん」と呼んでくれることだった。男子に名前で呼ばれるなんて、小学校低学年以来だ。あのころは親同士の仲がよかったりするだけで、こちらが欲し

かろうがどうだろうが、下の名前を呼ぶ権利を得ていた。もっとも無邪気な子供のことである。何のためらいもなく呼び合っていた。ところが、１６歳にもなっていざ口にされると、こうまで舞い上がってしまうものなのだ。
１６歳―もう少しで１７歳、という響きは胸にとくんとしずくを与える。
それだけで恋が始まる予感がする。

くすっ。
突然自分のものではない笑い声が聞こえ、桃香ははっとして現実の世界に戻った。今気が付いたのだが、向かいの席に同年代の男子が座っている。
「ええっ」
桃香は目を真ん丸にして、その男子を観察した。ずっと彼のことを考えていたので、本人が現れたかと思ってしまったが、どうやら違ったようだ。
しかし、年や背格好まで似ているので、本当に彼かと思った。息が止まるかと思った。

くすくす。
なおも見続けていると、男子はまた笑った。右手でソフトカバーの古そうな本を支え、左手は口元に寄せてこちらを眺めている。両者とも視線をずらさないので、変なにらめっこの形になってしまった。もちろん桃香は「ずらさない」と言うよりは、「ずらせなかった」だけなのだが。

あ、あたしのことを笑ってるんだ！

一瞬の間をおいてそのことが分かると、さっきまでのそわそわなんて生ぬるいものではなく、一気に顔の温度が沸点まで達した。

恥ずかしい！

桃香は机に放り出してあった本を鷲掴(わしづか)みにすると、すっくと立ち上がり、逃げるようにしてその場を去った。桃色にうずもれた桃香は、たしかに傍目で見ていて面白かった。面白いほど、可愛かったのだ。それを知るよしもない桃香は、ひたすら恥に感じ、眉の間に力を入れて、ずんこずんこと大股で歩いていった。

そしてそのまま、その日は図書館も出てしまった。

第3話：深呼吸

図書館を出ると、さっきまではガラスに仕切られていた向こう側の風が、桃香のすぐ脇を通っていった。今日は結局1時間ほどしかいなかったのでまだ日も高い。真っ白な雲が太陽の光を反射して浮かんでいる。

多少落ち着いてきて、ひとつ深呼吸を置いた。

あたし、よっぽど浮かれてたんだ。
メアドを誰かに聞かれたくらいでアホみたいに舞い上がっちゃって、ほんとアホなんだろうな。
常日頃から、友達に「ウブすぎる」やら「もっと現実を見なさい」やらだめ出しされているが、自分でもそれは納得できる。彼女たちの言うとおり、少女マンガのように理想の男の子が現れるなんて思ってはいないけれど、どうしても夢を見てしまうのだ。
だから告白したことはおろか、今まで誰からも告白されたこともなければ、現在好きな人すらいない状態が続いている。ちょっといいな、と思っても、かっこいい止まりで、それ以上の気持ちがわくことはなかった。
そんな、恋愛に関しては退屈な日々を送っていたところ、いきなり旋風が巻き起こって、整理するには時間が必要だった。

小鳥たちが街路樹の葉から葉へ、歌い上げながら日を浴びている。
土曜日のこの時間帯だと、部活があっても活動真っ最中なので、アーケードを歩く高校生はいない。ただ若い親子連れや、日傘を差した老夫婦が、眠たそうに歩いている。

「今日はもう帰ろ。」
桃香はひとりごちて、浅くうなずくと、駅に向かってとろとろと歩き出した。

第４話：報告

月曜日。

金曜日に始まり、土、日と彼とメールをしてきたが、まだ誰にもそのことを言っていなかった。そこで桃香は、仲のよい友達と静かに話が出来るチャンスを、朝学校に来てからずっと狙っていた。が、なかなか、意識しなければたやすい用事なのに、今か今かと待ちかまえているとかえって難しかった。休憩時間、教室内ではクラスの子がみんな教室のあちこちにいて、他の人に聞かれると嫌だし、廊下も野球部の軍団がたむろしていたり、テラスも先客がいるのでダメだった。

桃香が「聞いてほしいことがある。」と言ったきり、まだダメここも嫌と駄々をこねているので、友達たちも待ちくたびれてしまった。

「もう、何なの？朝から何か言いたいことがあるんでしょ？」そう言って、桃香の机をぽんっといい音をさせたのが、友達の一人である河合亜矢だ。すると今度はその隣から、

「あたしも知りたーい。何かイイことあったんでしょ？」

と、目を輝かせて別の子も聞いた。

「桃がそんなに場所選んでるってことは、まさか恋の話題とか～」キャハハハと声を上げて、顔をしかめる桃香をのぞき込んだ。この子は藤森かなこ。楽しそうなことがあるとまっしぐらで、恋とつけば尚のこと、興味津々になってしまう子だった。

桃香が黙っていると、

「えっ？そうなの？へえ～、いいなぁ～。」

かなこはさらに詰め寄った。

「いや、そんなんじゃないけど、てか今話せないの。」

「なんで？恋だって顔してるよ。そんなにここじゃダメな話なの？」

「だから、場所とかそういうのもあるけど。」
「何？」
「だから…、あの、言うのが恥ずかしいだけっ。」
桃香が照れると、
「え～、やっぱり好きな人でも出来たか。」
かなこはここぞとばかりに食らいついた。
「こらこら、あんたもほどほどにしなさい。桃、困ってんじゃん。ったく。」
「何で～。だって、亜矢だって知りたいだろ？」
かなこはぷうっと頬をふくらませると、じろっと亜矢を見上げた。
「桃の一大事だよ？」
「まぁねぇ。」
2人が何やかやと大声で話すので、桃香はあわてて、
「いや、一大事ってほどじゃないし。」
と、二人の会話を遮った。
あんまりもったいぶっていると拍子抜けされてしまうかもしれないので、桃香はやっと報告した。
「実はね、金曜の放課後、男子が教室までやってきて、ワーワー言いながらあたしに用があるっぽかったの。で、そのひとりにメアドを聞かれたんだ。」
「えーっ、桃が？男子に？」
「マジで。」
二人はびっくりして大声で叫んだ。
「すごいじゃん、かっこいい人なの？」
「うん。」
「へえ～。」
少なくとも、桃香でも他のかたまりくんたちとは違うな、くらいの識別がついたのだから、かっこいいと呼べるのであろう。かなこはまるで自分のことのように喜んでくれているけれども、亜矢はしかめっ面をして尋ねた。

「そいつ、いいやつなの？」
「え、さあ…、まだメールちょっとしかしてないから、よく分かんないけど。でも、いい人。」
「ならいいけど。あんまり調子に乗るようだったら、即あたしに言いなよ。」
「うん。」
「あんたは、警戒心なさ過ぎ、プラス超鈍感、プラス心配の種だよ。」
「そんなことないし。ちゃんと相手見るよ。」
「じゃあ、今まで誰かに見られてるなって感じたことは？ないでしょ。」
首を振る前に断定されて、桃香は口を突き出した。
「ちょっと、亜矢。心配しすぎだって、おかあさんみたいだよ。今は桃の春の訪れをみんなで祝福してあげるんです。だいたいね、そんなに怖がってたら一生恋なんて出来ないよ。恋は直感と賭(かけ)ですから。」
かなこは自信たっぷりに言い放つと、桃香の方を見てニッと笑った。
「これから恋してこうね。」
「うん、できるといいな。」
「ま、あんたはともかくあっちはもうその気でしょ。」
「うん、だけど悪い人だったらすぐ縁切ってね。」
そう言ってから、かなこはしまったと亜矢の方を振り返った。おまえも同じこと言ってんじゃん、と亜矢は鼻で笑って、かなこはごまかすように「まぁ、やっぱり友のことは心配だし」とむにゃむにゃつぶやいた。
桃香はそれがなんだか嬉しくて、吹き出してしまった。
「ありがと。」
二人に向かって目を細めると、彼女らも、
「は？何で礼言うのよ。」
「意味分かんなーい。」

と、笑顔で、びしばし否定した。

第5話：A組

「あ、そうだ。もう一つ聞いておきたいことがあるんだけど。」
亜矢は真面目な顔つきに戻って尋ねた。
「そいつって誰？」
あ、ホントだあ、忘れてたと、かなこも答えを促した。
「早坂蒼（そう）くんってひと。」
「早坂蒼…。ん～、聞いたことある気がするなぁ。」
「あ、まえチコたちがかっこいいって言ってたよ、たしか。へえ～、そういう風に騒がれてる人ってナルシとかかと思ってたけど、案外見る目あるんだね。」
「え？何で？」
聞いてから、桃香は褒められたということに気が付いて、「見る目がないの間違いでしょ。」と言った。
「まぁ、それはおいといて。」亜矢は顎に当てていた手を外して聞いた。
「それってA組の人？」
その言葉でようやく、桃香は亜矢が何をこんなにも心配していたのか分かった。
「ううん、違う。だから全然そんな人じゃないよ。４組だって。」
「４組？ああ、ならよかったわ。」
ふうっと肩を下げるのを見て、桃香は安心してもらえてよかったと思いながらも、心の奥の方にもやもやとした蟠（わだかま）りを感じていた。

実は、桃香たちが通うこの学校はある事情を抱えていた。
ここ、東城（とうじょう）高校は県内一の進学校と呼ばれていて、そのシステムも

少し変わっていた。Ａ組と４組―また、桃香たち３人の属する７組。ここに違和感を感じる人はないだろうか。
そう、Ａ組だけおやっと思うだろう。
東城高校は各学年普通クラスが８クラス、そして特別クラスと呼ばれるＡ組を合わせて一学年につき９クラスという編成である。８クラスのうち、１組から４組が理系、５組から８組が文系となっていて、理系は８割方男子が、文系は７割方女子が占めていて、そこは何ら他の高校とかわりはなかった。
しかし、この学校が進学校として名をあげているのも、また毎年１０人近くを東大に送っているのも、この特別クラス―Ａ組の存在に他ならない。
Ａ組はこの学校でも一番成績のよい二十五人が厳選されている。年度末ごとに特別テストがあり、そのテストの上位二十人ほどと、残りは先生たちが運営する委員会が選んでいた。そして、普段の授業から優秀な先生が当てられ、使っている教材もワンランク上のものだった。そこの生徒たちは、完璧な環境のもと、東大・京大を目指して日々勉強にいそしんでいる。
選りすぐりの生徒たちには勉強以外の不安も何もなく、凡人クラスの生徒には雲の上の存在だった。
まず、教室の前を通りにくい。非常に通りにくい。
そこのクラスだけ雰囲気が違い、妙な団結感があって、他をよせつけないオーラを放っていた。穏やかに見えて、実はお互い腹の探り合いをしているような緊張感が走っているのだ。

そんなクラスだったから、もちろん他の生徒たちには嫌われていて、目の前を彼らがすぎたなら冷たい視線を送った。Ａ組の生徒の方もそれを分かっているのか、普通クラスのことを嫌っていて、自分たちとは世界が違うのだと思っていた。
お互いが歩み寄ることはなく、嫌いという気持ちはエスカレートし

て、2年にもなった今は憎しみに近いかもしれない。

桃香も普通クラスの身として、A組が大嫌いであった。A組の子は成績を上げることしか頭にないように思われたのだ。

ただ、その嫌い方が少し変わっていた。

桃香は元々頭はよかった。しかし、A組なんかに入るもんかという意地で、特別テストはかなり力を抜き、自ら二十五人の枠を外れる努力をしていた。もし本気でやったなら、悠々入れるのだろう。でも、どうしてもプライドが許せなかった。

ぐるぐるぐると沈んでいて、桃香は唇をきゅっと結んでいたが、もやもやを振り切って言った。

「あははっ。蒼君はそんなんじゃないよ。それに、いくらあたしでも、Aの人に聞かれたら教えないし。」

「いやぁ、そうだよな。悪い悪い。」

亜矢は長い髪をかき上げて謝った。

かなこだけは、そんなふたりの様子を心なしか悲しそうに見ていた。

第6話：ふたりとひとり

やっと言いたいことも言えて、それからの授業は順調にすぎていった。
かなこと亜矢も、なんだか嬉しそうな後ろ姿を見ては、二人で目配せし合ってくすくすと笑った。

そんな中、かなこは筆箱で隠しつつ、プリントの切れ端に手紙を書いた。
【ＤＥＡＲ↓あや　早坂蒼って、サッカー部らしいョ♪放課後、チョット偵察に行ってみない？？もちろんあの娘には秘密でサ★】
【オッケーｗちゃんと任せられる相手かどうか、このあたしが見てあげようじゃないか。】
かくして、桃香には秘密の偵察部隊が結成されたのである。

そして放課後になった。
桃香はいつものように、二人のところにやってきて、「かなこ、部活いこ？」と誘った。
ちなみに桃香とかなこは美術部に属していて、亜矢はバレー部だった。
「あ～、ゴメンっ。今日課題出し忘れててさ、先生に呼ばれてるの。だからすごい遅くなっちゃうから今日ムリ。」
「え～、何やってるの？ダメじゃん。」
「ゴメンゴメン。」
「え～、せっかくデッサンしあげようって言ってたのに。」
「明日は行くから。」
桃香は不満げな顔で納得すると、亜矢にバイバイと手を振って、教室を出て行った。

亜矢はじろりとかなこを見下ろして、
「あ～あ、あんた悪いやつだね。あれ、怒ってないか？」
と言った。
「まぁしかたない。これも桃香のためだ。それに亜矢だって同罪でしょ～。」
と言い返し、二人はグラウンドに向かった。

桃香は仕方なく一人で美術室に向かったが、誰も来ていなかった。電気すらついていなくて、ひんやりとした室内に、古い絵の具と石膏のにおいが立ちこめている。今挑戦中の石膏はモリエールというおじさんで、薄暗い中、自然な太陽の光が当たっていた。石膏にもいろんな顔があって、男も女も金持ちも貧乏もいる。
その中でも、モリエールは品のよいおじさんといった風体（ふうてい）で、たっぷりとした長髪に、口ひげがついた、目の大きい人なのだが、桃香はけっこう気に入っていた。描いている間は長いこと見つめているので、なんだかだんだん惚れてくる気がする。
「いつもよりかっこいい…」
暗い分、陰の部分が広くて、ドラマチックになっている。

がちゃり。
と、そのときドアが開いた。
「お、小谷か。」
「あ、顧問。」
「今日は人が少ないなぁ。まぁわしも今日は帰るわいな。したかったらしていけばいいが、戸締まりはちゃんとしとけよ。」
「あ、はいっ。」
顧問はモリエールの方に目を細めると、うんうんとうなずいて、静かに美術室をあとにした。何となく去っていくのを眺めていたが、

ふと静けさに気付いて、無性に寂しくなってきた。
モリエールとあたし。ふたりぼっち。…かなこ来ないし。
たたずんで迷っていたが、
「あたしだけ進んじゃってもダメだ。おしっ、今日は図書館行こう！」
心を決めると、くるりときびすを返して、桃香も美術室をあとにした。

第7話：出会い（1）

つい二日前も行ったばかりだったが、あのときは全く読めなかった。
高校から図書館までは歩いて15分ほどの近さにあるので、こうやって不意に暇になったときに寄る場所としては、最高の場所である。
もちろん、本の虫の桃香にとっては、ということだけれども。

日が長い季節なので、四時すぎとは思えない明るさだ。
帰宅部の人たちがちらほらと帰っていく中、ひとり違う方向へ曲がって、軽やかに歩いていった。集まらない美術部に対して不機嫌になっていたのはきれいに忘れていた。

館内に入って、桃香は鼻歌でも出そうな勢いで、本棚から面白そうな本を一冊選び出した。そして悟られぬようにほくそ笑むと、窓際の机に腰掛けた。
平日の夕方なせいか、席はがらがらに空いている。
それを確認して満足し、いよいよ本の世界に落ちていった。

どれくらいたったのだろうか。
誰かの視線を感じて、ふと顔を上げた。
まだ現実に戻りきれておらず、心が宙にさまよっているようだ。ぼんやりと視線の元を探すと、机の前に人が座っている。
あ、東（とう）高の人だ。

ぶるぶるっと頭を振り、意識をはっきりとさせた。
こんなところで高校生に会うなんて珍しいなぁ。この人も本が好きなのかな。
そんなことを考えながら、あれ、と気が付いた。
何でずっとこっち見てるの？
「あの、」と聞きかけると、続きを言うより前に、その人が口を開いた。

「君、東高だよな。」
「え、あ、はい。」
「俺も。」
そう言うと、その男子は生意気そうにほほえんだ。桃香は、
「それは、見れば分かります。」
と、率直に答えた。すると、彼は気の強そうな目をわずかに見開いて、
「何で。」
と聞いた。
「え、だって校章ついてるから…。」彼の制服に付いた校章を指さした。彼もそれを見て、
「あ、それはそうだな。」と納得した。それきりなかなか次の言葉を言わないので、桃香は沈黙を破ろうとして、
「それで。」と、促した。
「ああ、俺が東高って分かるなら話は早いや。あのさ、きみ何年？」
「2年です。」
「じゃあちょうどいい。俺も2年なんだけど、頼みがあるんだ。本当はこんなこと、会ったばかりの人に頼むなんておかしいって思ってる。けど、他に頼れるやつもいなくて、どうしようかなって考えていたときに、たまたま同じ東高の人に会えたんだ。無理は言わないけど、ひきうけてくれない？」
「それは話によりますけど。」

「実は、今度の選挙で立候補しようと思ってる。」
「選挙？それってまだまだ先の話じゃないですか。だって今5月でしょ。次っていったら9月になりますよ。」
桃香は目を丸くした。
「そんなこと知ってるよ。まあ話を聞けよ。
で、その選挙はおまえも知ってるだろうけど、応援者ってのが、応援演説するだろ。普通は前生徒会長とか、立候補者のダチとかがやるもんなんだけど、俺の場合、おまえにやってもらいたいんだ。」
「あたし？え、何でですか？」
「今日、こんなところで会えたから。」
「何それ。意味分かんないし。」
「いや、そうなんだけど。」
「もしかして、あなた友達いないんですか。」
言ってしまってから、桃香はしまったと口をつぐんだ。いくら何でも、初対面の人に失礼だったかもしれない。しかし、向こうの言い分も訳が分からない。なぜ初対面の人に応援演説などを頼むのだろうか。本当に友達がいない人なのかも、と思って、桃香は相手を観察した。

座っているから分かりにくいが、背はそこそこ高そうだ。顔は整っていて、髪型も制服も、清潔感あふれている。かといって、真面目一点張りというのではなく、センスがいいといった感じだ。これなら友達も多そうで、女の子たちにも好かれていそうだ。

「いない訳じゃない。」
彼は渋い顔で視線をしたに逸らした。
「ごめんなさい。そんなつもりじゃ。」
「あ、別に正直に言ってくれていいよ。その方がラクだし。
ってか、やっぱりいないのかも。みんな表面だけっていうか、俺がホントに信頼してるやつはいないかもしれない。」

そんな悲しいこと言わないでほしい。桃香はそういう世界は女子だけだと思っていたので、男子の世界も大変なんだと、少し驚いた。

「じゃあ、何であたし？」

第8話：出会い（2）

じゃあ何であたし？

ついさっき知り合ったばかりの人に頼むなんて、何かよっぽどの理由があるのだろう。それでも、唐突すぎて、道の真ん中からいきなりピエロが現れたようだ。そのピエロはどうもこちらに話しかけているようで、滑稽な服に包まれて手を振っている。
ここはひとつ、手を振り返してあげるべきなのか。

「そんな簡単に決めていいんですか。」
この人の真意をつかもうと、慎重に言った。
「簡単？ああ、確かに決め方は簡単かもしれない。間違ってるかもしれない。てか、普通しないだろ。けどさ、なんつーか、その、俺にとっては一大決心だった訳よ。」
彼はわずかに困ったように答えた。
「あたしに頼むのが、ですか。」
「はぁ？」
眉根を寄せられて、桃香も少しむっとした。
「何でおまえに頼むのに、一大決心なんかしなきゃいけねぇんだよ。そうじゃなくって、生徒会長に立候補するってことがだよ。そんなめんどくさいことする気はなかったんだけど、でも、どうしてもやってみたい理由ができてさ。それ、どうしても実現したいんだ。俺にできるっていう自信がある訳じゃないけど、俺しかやろうとしないだろうし、だからこそ全力を尽くす。」
「何をですか。」
「それはまだ言えねぇ。けど、俺が生徒会長になれたら、約束するよ。がんばるから。東高を根本から変えるんだ！」
桃香はあっけにとられて、ひとり熱くなっている少年に見とれた。

かける言葉を探していると、ふたりの間の温度差に気付き、彼は涼しげな顔に戻った。
「悪ぃ。誰かに言ったの初めてだったから、つい。駄目だなー、言い出したら止まんねぇや。」
「あたしに立会演説されても困る。」
「まじ？それっぽかった？」
「どっかの政治家っぽかった。」
桃香が口をとがらすと、彼は「ははっ」と笑って、桃香をじっと見据えていった。
「じゃあ、やってくれる？」
「えっ、無理です。第一、あたしあなたのこと何も知らないし。」
すると、彼は待ってました、と言わんばかりに、
「なら、俺のこと知って。」
とにやりとした。

その後、二人は本などそっちのけで話を続けたが、あまりにもうるさくて、司書に注意される始末だった。その結果図書館を追い出され、なお決着がつかず、図書館の入り口のベンチでわいわいと話をした。
そしてとうとう、桃香は言いくるめられてしまった。桃香自身は、まだ了承していないつもりなのだが。

その話の中で分かったこと。「俺のこと知って。」という発言に忠

実に、彼が自己紹介をしてくれたので、桃香は多少なりとも彼のことを知った。

名前は宮本瑛太(えいた)。
外見に似合わず、趣味は読書で、こうやってよく図書館にも通っている。読むのはもっぱらファンタジーものが多く、最近は古典にも興味を持ち始めた。
桃香もファンタジーしか読まなかったが、高校生にもなったのだから、少しは難しそうなのにも挑戦してみたいと思っていたところなので、今度いろいろお薦めの本を紹介してくれる約束をした。
縛り付けられるのがいやなので、部活は入っていないらしい。そのことを教えてくれたあと、付け加えるように「ちなみに彼女もいないよ。」と言ったのがフラッシュバックして、クスリと笑った。
宮本瑛太の情報を指折り思い出していくうちに、ある事実に気が付いて、桃香は愕然とさせられた。

あたし、ほとんどあいつのこと知らない！むしろ、あたしのことばっか話してた！！

組から家族構成から部活から…。全部覚えたなら、桃香のことをかなり網羅(もうら)したことになる。
メールアドレスさえ交換せずに、バイバイをしてしまったようだ。
とくに欲しかったわけでもないが、携帯を握りしめ、何となく後悔をした。

第9話：たじたじ

おはよう。
おはよう。
おはよう。

朝の教室は気持ちがいい。校舎が一気に目覚め、だんだん賑やかになっていく。来た人から順に競うようにして、ベランダに出ておしゃべりを始めている。5月と言っても、朝はまだ涼しくて、寒いくらいだ。その中に、桃香たち3人の姿もあった。

「昨日、見たよ。」

ゴメンと両手を合わせて、かなこが言った。

「何が。」

「昨日、課題がとかいって部活休んだじゃん。あれ、一人でモリエール描いてた？」

「ああ、ううん。他の人も来てなかったから、そのまま帰っちゃった。」

「そっか…。もっと集まりいいといいのにね。」

「うん。」

二人はため息をついた。

「あ、それで、見たって何を。」

「ああそうそう。あのねえ～。」かなこは口を横に広げてにいっとし、

「誰でしょうー。」と引きつって笑った。

「え、さあ。誰。」

「知りたい～？」

「早坂蒼。」横から、いたって冷静に亜矢が答えた。するとかなこはもうっと怒りながら、

「何で言っちゃうの？」と言った。
「もったいぶるようなことじゃないでしょ。」
「え、え、何で？会ったの？」
桃香はかなこの肩をばしばしたたいた。
「桃香を狙うなんてどんなやつかと思ったから、確かめに行った訳よ。」
「狙うって訳じゃ。」
「まぁ、そこはいいから。でもさすがに本人連れてくのはまずいでしょ。だから亜矢と二人で、あのあとグラウンドまで出て行って、サッカー部が部活してるの見てきたんだよ。そしたらね、あたしも顔とかよく知らないからどうしようかって思ってたんだけど、サッカー部って亜矢の彼氏いるじゃん。で、教えてもらったの。もう、亜矢ってばその人の前では女の子でかわいかったよ～。」
亜矢がつっこみをいれたので、かなこは先を続けた。
「それで、早坂蒼。そいつ、めちゃくちゃサッカー強かった。うん、確かにかっこいいかもしれない。チコたちが騒いでたの分かったわ。もてそうだよ。」
桃香はかなこのバラ色モードに気圧されながら、「へ、へぇ…。」と相づちだけ打った。
「そんなにいうなら、かなこが狙えば？かなこだって、前からかっこいい人探してたじゃん。」
心からそう思って言うと、かなこは目をつり上げて怒った。
「何言ってんの。あたしは、桃香に早くいい相手が現れないかなってずっと楽しみにしてたから、こうやって喜んでるの。そりゃあかっこいいとは思うし、いい人そうって感じたけど、自分が好きになるとかじゃない。第一、早坂蒼は桃香のことが好きなんだよ。」
「ごめん。」
「もう、分かったならそれでいいの。桃香は自分のことを考えればいいから。」
激しい剣幕でまくし立てられて、桃香は小さくなってしまった。

ちょうどその頃、二年七組の上の階のベランダにも、おしゃべりをしている集団がいた。A組の男子たちである。
「へぇ、そうなんだ…。」
そのひとりは、ベランダにもたれて、顎を指でちょんちょんとつつくと、唇の端を持ち上げた。
「早坂蒼。」覚えた、と声に出さずにつぶやいて、教室に入っていった。

その日一日、かなこは機嫌が悪かった。亜矢に尋ねると、あいつもいろいろあるんでしょうよと返された。

その通り、かなこには誰にも言っていなかったが好きな人がいたのだ。ずっと一途に想い続けている人が。これを二人に打ち明けるのは、もっとずっと後のこと。

第１０話：あいつ

恋ってめんどくさいなぁ…。

まだ始まったばかり、いや始まってもいないくせに、桃香はため息をついた。

いらないことで喧嘩するし、メールの内容を考えるのも大変だし、普段より考えなきゃいけないことがいっぱいあるんだもん。かなこは蒼君のこと、好きなんじゃないかな。あたしがいるから遠慮してるのかな。

かなこが怒ってから、何となく気まずくなって、早坂蒼の名前を口に出さなかった。本人とは2，3日に一回はメールを続けているが、自分のことを好きという兆しは全く見えない。亜矢に話しても、チェリーボーイなんだよと決められた。

桃香はベッドにダイブして、足をばたばたさせた。山に向かって、思いっきり叫びたい気分。さもなければ、破壊したい気分。恋という甘ったるい衣装を脱ぎ捨てて、駅の広場で裸で踊り出したい。

たかが恋でこんなに悩むとは思わなかった。

これも桃香が恋に免疫がなさすぎるせいだろう。

もっと簡単に、素直になっていけばいいのに。好きなら好き、嫌いなら嫌い。

胸の奥で、もうひとりの桃香がいった。

素直に？

そう、Ｔａｋｅ　ｉｔ　ｅａｓｙよ。蒼君のこと好きなの？

うーん…。

そのとき、携帯がぶるるると震えて、メールの受信を告げた。
ごろんと寝返りを打って手に取ると、噂の人で、蒼君だった。
【課題終わった？俺、ヤバイ～今必死でやってるとこ。
話変わるけど、来週の日曜にサッカーの試合があるんだ。よかったら応援しに来てよ。
そしたら頑張る！笑】
読み終わって、返信を押しかけたが、ためらってそのまま携帯を閉じた。

蒼君のこと、まだ好きじゃないみたい。だって、直接話したことないんだよ。
もうひとりの桃香に話しかけたが、胸の奥はしーんと静まりかえって、返事はなかった。
もう寝ちゃったの？おやすみなさい。
桃香も目を閉じた。

翌朝、廊下で久しぶりな顔を見かけた。
図書館で会った、自称次期生徒会長である。名前は宮本瑛太。あいにくの記憶力でばっちり覚えてしまっているが、相手もそんな記憶力を持ち合わせていないといいのだが。さっさと忘れて、別の応援演説者を見つけ出して欲しい。
彼は階段を上がるかと思われたが、目が合うとこっちに向かって歩いてきた。
「おはよう。」
覚えてたぁー。ちょっと渋い顔をしながら、
「おはよう。」と返した。この人、人を見透かしたように笑うから苦手だ。
「考えてくれた？」
「何のことでしょう。」

「とぼけてみたって無駄だって。応援演説、やってみる気になった？」
「あのさ、それやっぱり他の人に頼めないかな。だって、あたしとかムリだよ。知り合いになったばっかだし、それも何か無理矢理っぽかったし。それに、結局あたし、宮本君のことほっとんど知らないままなんだけど。」
「えー、この前だいぶ説明したじゃん。」
「はぁ？どっちかっていうと、あたしばっかり言わされてたよ。後で考えてみたら、宮本君のことで知ってることって、名前でしょ、部活でしょ、それから本が好きってことくらい。」
桃香は指折り数えて、三本指を立てて見せた。「ほら、これだけじゃん。」
瑛太は馬鹿にした目つきでふっと笑った。
「あのとき俺ら、どれくらい話してたっけ？かなり長いこと話してたよな。」
桃香はとまどいながらも、「1時間くらい…、いや、もうちょっとかな。」と答えた。
「それだけ話しておいて、たった3つしか情報をもてないって、おまえどんだけ馬鹿？」
「馬鹿？あたしが？」
「そうとしか言いようがないだろ。俺のこと知るはずが、自分のことばっかぺらぺらぺらぺらと。」
「何言ってんの。もともと、あんたから話さなきゃいけない立場だったんでしょ。聞かれなくても普通自分から言うのが礼儀ってもんよ。それを何がぺらぺらぺらぺらって。あたしだってそんなに話したい訳じゃなかったのに…、てか、もうじゃあ何も言わない。もう自分のクラス行ってよ。」
馬鹿にされたのが悔しくて、桃香は相手を突き飛ばすようにして教室に入ろうとした。
「おい、待てって。」

瑛太に肩をつかまれ、仕方なく振り返ると、
「じゃあ今度は自分から、話してあげるから。」
と、瑛太が言った。
「別にもう興味ないんだけど。」と冷たく言って、肩の手を払うと、
瑛太はもう一度捕まえて、
「そう言わずに。自分だけ知られて終わりとか嫌だろ？次の日曜、
空いてるか？次の日曜の朝十時に、駅で。」
それだけ言って、すぐに手を除けると、さっさと上の階に上がって
いった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1331c/

５月の風

2011年1月26日16時17分発行